一八八一年、魚允中の清国行きについて

崔　蘭英

Ⅰ．はじめに

魚允中（一八四八～一八九六、字は聖執、号は一齋、諡号は忠粛。本貫は咸從、忠清道報恩の人）は、朝鮮の近代的改革を目指した「開化派」の一員として知られている。魚は一八六九年に文科及第してから假注書に任命され、すぐに国王高宗への進講に参加した。一八八一年一月に東萊暗行御史（通称「紳士遊覧団」または「朝士視察団」[1]）を拝命して日本を視察し、十二月に復命した後は開化政策を推進する統理機務衙門の主事[2]に任命されていた。そして八二年からは清との交渉を担い、「中国朝鮮商民水陸貿易章程」、「中江貿易章程」、「会寧通商章程」などを協定した。対清交渉の実務を担当していたことや、甲申政変に直接関与していなかったことから、魚允中は「開化派」の中でも「親清派」あるいは「穏健的開化派」に分類されている[3]。一八八四年の甲申政変以降は閑職に回されていたが、九四年の甲午改革で金弘集内閣[4]が成立すると、度支部大臣になって財政改革に当たった。しかし九六年に国王高宗がロシア公使館へ亡命（「俄館播遷」）し金弘集内閣が崩壊したことにより、魚允中は帰郷しようとしたところ、その道中で殺害された。

魚允中の経歴の中では、一八八〇年代初頭の対清交渉がとりわけ注目される。当時の魚允中の官職は弘文館校理（正五品）であり、堂上官でもなかったにもかかわらず、朝鮮を代表して清との交渉に臨むことになったことである。官職に比して責務が重大であり、この点については国王高宗も認識していたが、「事にしたがって善処するように」と、あえて彼に清との交渉を託したのである[5]。ここで魚允中が起用された最大の理由は、一八八一年に「紳士遊覧団」の一員として日本視察の途中に長崎から清に渡り、天津まで行って、北洋大臣李鴻章や天津海関道周馥ら復数名の洋務派官員と面会していたことにあると思われる[6]。しかし、この時の魚允中の清国行きはどのように実現し、清国でどのような行動をしたのかということについては、資料が乏しく、解明に至っていない。

この一八八一年の魚允中の清朝行きについては、思想史の研究分野においても注目されている。趙景達氏によれば、「彼〈魚允中――筆者〉の国家に関する価値観は一八八一年の紳士（朝士）遊覧団行とそれに続

く清国天津行とによって一大転換している。それ以前の彼の国家観は素朴小国主義とも言えるものであった」が、日本・清国行から帰国して復命すると、「富国強兵策の必要性を表明した」。趙氏はさらに魚允中の著した「海軍拡張論」という文章をもとに、魚が「陸軍よりも海軍をより充実させるべき」と主張している点にその富国強兵策の特徴があると指摘している。[7] 魚允中が日本行きにあたって、国王から与えられた任務は「海関事務やその他のことについて見聞き」することであり、主要な視察先は「大蔵省」であった。[8] 魚允中が海軍に特別な関心を示した理由および「富国強兵」に思い至った経緯はどのようなものだったのだろうか。

魚允中の「富国強兵」への関心は、一般に彼が進歩的な開化思想の持ち主であるという評価につながっている。魚允中が「国債や財政に対しての憂慮から、日本式産業振興政策を選別的に採択して推進する立場」[9]であるものの、ほかの「紳士遊覧団」メンバーと同様に、日本をモデルに近代国民国家の建設を構想し、早い段階で「開化」思想を持っていたように見られる傾向があるが、果たしてどうなのか。彼の具体的な「開化」思想の形成と内容については、まだ充分に解明されているとは言い難い。

問題の所在は、これまでの研究が一八八一年の魚允中の清国行きはなぜ、どのように実現したのか、彼が何を見聞きし、どんな影響をうけて「開化思想」を形成したのか、という検討すべき事項が十分行われないまま、魚允中が「進歩的な開化思想の持ち主」であるがために、「開化」・「近代化」の道へと進んだという予定調和的な見方にある。本稿は、従来の研究に使用されてきた魚允中の日記や「紳士遊覧団」関係資料に近年新しく発見された魚允中の筆談記録「談草」を加えて、魚允中の清朝行きの経緯を検討してみたい。この作業はまた、魚允中の「親清」開化派としての起点を検証することであり、「開化派」の思想形成と朝鮮の「開化政策」にかかわる諸要素を検証することでもある。

便宜上、本稿では年を陽暦にし、月、日は史料の記載通りに陰暦を使用した。

Ⅱ．「紳士遊覧団」の派遣

一八八一年の朝鮮は、対外的にいくつかの課題を抱えていた。日本とは一八七六年の「日朝修好条規」締結以後、開港場や関税をめぐる問題が未解決のままで交渉は難航していた。また、一八八〇年五月にアメリカから通商条約の締結を求められ、朝鮮はそれを拒否したところ、日本からも、清からも対米開国を勧告され、対応に苦慮していた。その中で開国論が少しずつ台頭するが、国内の反対勢力は殊のほか強かった。とりわけ一八八〇年に第二次修信使金弘集が清の駐日公使館参賛官黄遵憲[10]の著した、朝鮮の対外政策の指針を示した『朝鮮策略』を持ち帰った後に、「攘夷論」が激しく噴出し、「辛巳衛正斥邪上疏運動」に発展したのである。

同時に、朝鮮自身の対外的危機意識が高まっていた時期でもある。朝鮮は日清からロシアの脅威に関する情報に接し、現実にもロシア領域への越境民問題に直面しており、ロシアへの警戒が徐々に強まっていた。さらに朝鮮は、ロシアと清のイリをめぐる紛争の激化やアヘン戦争や太

平天国以後に弱体化した清の国力への不安から、従来のように専ら清朝に依存するだけでは生き抜いて行かれないことを悟っていたのである。[11]

こうした状況の中で、「紳士遊覧団」が派遣されることになった。これは日本からの誘いではなく、国王高宗の決断によって実現したものであることは、既存の研究で指摘された通りである。[12]ただ、そこには花房義質[13]駐朝鮮弁理公使をはじめ、日本政府の協力があった。許東賢氏はその理由について、日本が一八七六年以降、修信使の招請を通して、自国の西洋式文物や制度を朝鮮に紹介しながら、兵器類を寄贈するなどして、朝鮮に日本式の近代改革を始めるように誘導していたことと、一八八〇年にアメリカとの修交を仲介しようとしたことを挙げて、日本は「朝鮮の開化と独立の擁護者と、帝国主義侵略者という二つの顔」を持っているため、「紳士遊覧団」の視察を全面的にバックアップしたのだとしている。[14]そこで、高宗は一月十一日に六名、二月二日に四名、二月二六日にさらに二名追加して「探求日本国国勢形便」の密命を授けた。[15]魚允中の例ではその密命の具体的な内容はすなわち、「朝廷議論、局勢形便、風俗人物、交聘、通商等事之大略、一番更探甚好、爾須着念、混騎日人船隻、渡往彼国、大蔵省所掌事務及他多少聞見、勿拘年月久近、一一探来」となっている。[16]他のメンバーは傍点部の担当する視察先が異なるだけで、みな同じ文言のようである。

しかし花房公使は「紳士遊覧団」派遣の目的をそれほど単純なものと見ていなかった。彼は一行の派遣が決まった十日後の一月二一日に、金弘集との筆談、そして李東仁[17]との筆談で「紳士遊覧団」のことを聞いて、一行のことを「数輩ノ日本ニ潜行スル者」であると記している。また、李東仁からは、彼もいっしょに日本に行き、陸軍その他の教師を招聘し、且つ「公債」を起こして兵器を調達する予定があると聞いた。花房はこのことを石幡貞[18]に確認させて、外務省に報告した。[19]

花房はその後、購入する「兵器」が「砲船」、「礮艦」であると聞きつけたので、一月二六日に、石幡貞が金弘集と李祖淵[20]との筆談の中で、礮艦の購入に協力する前提で渡航する人の名前を尋ねた。すると、二人は慌ててそれを否定し、「紳士遊覧団」の目的はもっぱら遊覧し、見聞を拓くことにあり、礮艦の購入は李東仁の説に過ぎないと説明していた。[21]ところが花房はそれを信じなかった。彼は外務卿井上馨に、「此挙金李二人実二賛画セル処ナレトモ　陽ニハ東仁ノ所作トセルヲ以テ」いると報告している。つまり、金弘集と李祖淵は戦艦の購入を主導しているが、表向きには李東仁の計画にしている。失敗した場合にはリスクを李東仁に負わせて、成功を待ってしかるべき時期が来たら公にするつもりであるとも述べている。[22]当時、朝鮮では新式軍隊（別技軍）を編成するなど、高宗を中心に軍制改革がすでに進行中であった[23]状況から言って、花房の見方は外れていないであろう。

また、金弘集は「紳士遊覧団」のことを極秘事項であるとし、隠しているわけではなく、自分は実際にその詳細を知らないのだと石幡に言った。ただし、その中に洪英植[24]と魚允中の二人が入っていることは知っており、この二人は「我輩人」であると述べた。[25]

こうして極秘に派遣された「紳士遊覧団」のメンバーには、大蔵省を視察担当とする魚允中と陸軍省を担当する洪英植のほかに、文部省を担当する趙準永（一八三三～一八八六）、内務省を担当する朴定陽（一八

四一～一九〇五）、工部省を担当する姜文馨（一八三一～没年不詳）、税関を担当する趙秉稷（一八三三～一九〇一）、閔種黙（一八三五～一九一六）、李鑢永（一八三五～一九〇七）の三人、外務省を担当する沈相学（一八四五～一八九〇）、司法省を担当する嚴世永（一八三一～一八九九）、陸軍操錬を担当する李元会（一八二七～?）、汽船運航を担当する金鏞元（別遣、一八四二～一八九六）がいて、合わせて十二名であった。金鏞元が一八七六年に「画員」として第一次修信使に随行していた以外、みな初めての渡日となるが、嚴世永が一八六六年に、姜文馨が一八七二年に、閔種黙が一八七五年に、清へはすべてが朝貢使節の書状官として赴いた経験があった。

彼らは名門の出身が多く、かつ高宗の側近で信頼された者たちであった。[26] また、花房は彼らがいずれも大院君勢力と拮抗している「閔氏党中ノ人」であり、とりわけ李東仁の輩はここで成功して、一挙にその勢力を「閔党」に移したい打算があると見ている。[27] 同じ「党中」であれば、そこに力関係の構図があるはずである。派遣された直前の彼たちの職位を見ると、趙準永、朴定陽が参判で従二品、趙秉稷が副承旨、閔種黙、李鑢永が参知、姜文馨、嚴世永、沈相学が参議で正三品、李元会が水軍節度使、金鏞元が慶尚左道水軍虞候、洪英植が応教で正四品であったのに対して、魚允中は校理で正五品、この中では一番低いものになる。[28] また、年齢は洪英植が一番年少で、次に若いのは魚允中である。しかし洪英植の父は領議政の洪淳穆である。このように見ると、魚允中は国王の側近ではあるが、メンバーの中では比較的に政治的バックグランドが弱いほうであったと言えよう。

メンバーはそれぞれ数名の随員、通事、下人を帯同しており、一行は合わせて六十三名であった。通事と随員の中には、以前に日本を訪れたことのある人が多数存在している。たとえば、姜文馨の随員である辺宅浩は一八七六年の第一次修信使金綺秀に書記として同行し、閔種黙の通事である金福奎は一八八〇年に第二次修信使金弘集に通事として同行していたことが確認できる。また、洪英植の随員である高永喜は第一次、第二次修信使の両方で通事を務めていたほか、同年の閏七月七日に第三次修信使に任命された趙秉鎬（八月二七日に釜山を出発し、翌二十八日に長崎に到着した）には「判事」として同行していた。

しかしこの中に戦艦を購入する予定の李東仁はいなかった。花房の外務省宛ての報告には、李東仁が銀六百両と虎の皮二十枚を持参し、紳士遊覧団と釜山で合流する予定だとしているが、[29] 三月十七日には李東仁が銀と虎の皮を置いたまま失踪したと報告している。[30] その後の花房の文書には、李東仁についての記録はなく、確認ができない。ただ、李元会の随員である宋憲斌の著した『東京日記』六月二五日条には、新聞に李東仁が千歳丸に乗って長崎に来てしばらく滞留しており、高島炭鉱、錬鉄場、造船所等を回ってから、大阪造幣局、砲兵工廠等を見学した後に、また東京に来たと報道されていると記述してある。[31] ただし、李東仁は当時東京に滞在していた紳士遊覧団メンバーと会ったかについては記録がなく、不明である。

魚允中は兪吉濬（一八五六～一九一四）、柳定秀（一八五七～一九三八）、黄天彧（一八四三～没年不詳）、尹致昊（一八六五～一九四五）の四人の随員を帯同していたが、のちに金亮漢の名前が名簿に書き加えら

れている。[32] 他のメンバーの随員の中には同族がいることが多いが、魚允中の場合はそうではなく、また四人の随員全員が魚允中と同行しなかった。[33] 兪吉濬と柳定秀は慶応義塾に入学し、尹致昊は中村正直（一八三一～一八九一）創設の同人社に入学したことがよく知られているが、実は、彼らは朝鮮を出発する前からすでにそのように予定していた。[34] ただ柳定秀は「紳士遊覧団」の帰国時に一緒に朝鮮に帰国したようであり、[35] その後に再度渡日した可能性があるが、時期は不明である。金亮漢については、一行より遅れて五月十日に来て、魚允中のところに留ることになったという。[36] 彼も帰国せずに日本で造船技術学ぶことになったのである。[37]

以上で見てきたことから、朝鮮の対外的危機意識が高まり、兵器、戦艦の購入を検討するなど軍備の増強を図る時期に、「紳士遊覧団」が派遣されていた。魚允中は洪英植とともに、第二次修信使として前年に訪日した金弘集そして李祖淵と同じグループに属していたことから、大蔵省への視察の任務が与えられながら、戦艦の購入計画にもかかわっていたのであろう。また、留学生を帯同することもその目的の一つにあったのである。

Ⅲ. 魚允中の日本視察

渡日した背景と目的が明白になったところで、魚允中の行動と「紳士遊覧団」全体のそれとを比較しつつ、彼の日本視察を見てみよう。

この間の行動について、魚允中自身による記録は『従政年表』にあるごく簡単な記述しか現存していないため、全容を把握することができない。そこで、『朝士視察団関係資料集』に収録されている朴定陽の『従官日記』、李鑢永の『日槎集略』、姜晋馨（姜文馨随員）の『日東録』、宋憲斌（李元会随員）の『東京日記』を参照して魚允中の行動を跡付けてみた。

まず、行程の概要については以下の通りである。魚允中たち「紳士遊覧団」一行は一八八一年四月十一日に長崎に到着して、十六日から二六日までに神戸、大阪、京都に滞在した後、横浜を経由して四月二八日に東京に到着した。東京滞在中、魚允中は宇都宮や日光、横浜等にも視察に行っていた。そして他のメンバーが帰国するのを見送るため、七月二一日に横浜に行った。その後に魚允中はまた東京に戻り、さらに約二ヶ月間滞在して、八月二七日に横浜から神戸港に向かった。同じ日に、第三次修信使の趙秉鎬、従事官李祖淵一行が朝鮮を発って日本に向かっていた。九月一日に神戸で第三次修信使一行と会ってから、長崎に赴き、九月六日に上海へ出発し、清に渡ったのである。

次に、以下の一～四の節で魚允中の行動とともに、どんなことが起こっていたのか、それらの持つ意味と合わせて検討する。

一. 釜山を出発するまで

魚允中は一月十一日に東萊府暗行御史を拝命して二四日に洪英植と一緒にソウルを出発したが、三月二十日になって、ようやく釜山から十七里離れた東萊府に到着した。ほかのメンバーはすでに約一カ月前の二月二七日までに釜山に到着しており、魚と洪を待っていた。そこで朴定陽は、いつになったら乗船できるかと、なかなか来ない魚と洪に対して苛

立っていた様子であった[38]。ところで、李東仁が二月二六日に釜山に来る予定であると朴定陽の記録で確認できる[39]。このことは、花房の報告が事実であることを証明するとともに、李東仁の兵器・戦艦購入計画は、この時点においても変わっていなかったと考えられる。

魚と洪がメンバーと合流したところで、「紳士遊覧団」はいよいよ出発する。一行は途中の約束ごとを決め、高宗から預かった旅費の「内帑金」五万両を、金鏞元を除いた十一人で四千五百四十五両ずつ分配した。日本円に換算すると一人当たりが約千三百六十五円となる。随員と下人の費用はどのように賄われるかについては不明であるが、釜山で通事を交代させた李鑢永は、新しく首席通事として同行することになった林琪弘に「治行銭五十緡」を支給した。ちなみに釜山から長崎までの船賃は上等船室が九円五十銭で、中等が七円、下等が四円であった[40]。

そして一行は釜山に留まる間に、日本領事の近藤真鋤と数回にわたって面会をした。三月二六日の面会で、魚允中、洪英植と李鑢永の三人は近藤に日本人通訳として武田邦太郎を推薦された。魚と洪は武田の雇用を約束したようであるが、このことについて李鑢永は聞いておらず、二日後の二八日に近藤に知らされた。李鑢永は、これは他のメンバーと相談しなければいけない事案であると述べた。結果的に武田が同行することになったが、李鑢永の目には洪・魚の行動がやや身勝手に映ったのであろう[41]。

また、近藤は会談の場において、東京で博物会を見学することと、長崎で炭鉱を視察することを勧めた。魚・洪が同席する中での李鑢永の発話になるが、朝鮮の蔚山に石炭が産出するという話を近藤から初めて聞いていたので、長崎に着いたら必ず炭鉱を視察すると記録されている[42]。ちなみに前年第二次修信使が訪日した時は長崎に寄らず、神戸港から船に乗り換えて東京に向かっていた。今回はいったん長崎に行き、そこから神戸を経由して東京に向かうことになるので、「紳士遊覧団」の視察先として、長崎は必見の地であったのであろう。

二．長崎から東京へ

こうして一行は安寧丸に乗船して四月十一日に長崎に到着した。全員が荒波のせいでひどく船酔いをしたが、翌日すぐに高島炭鉱、造船所を見学し、清国領事館を訪問して領事の余璃[43]と会った。余は陽明学に詳しく、書に長けていた。また、朝鮮問題にも関心が高く、たびたび清に意見を具申していた。余の考えは、黄遵憲の『朝鮮策略』にあるように、朝鮮を「聯美親清」させることで、ロシア及び日本を牽制する路線上にあったと指摘されている[44]。

そして一行は十三日に税関を見学した。宿泊地には、かつて朝鮮通信使が日本に来た時のように、多くの日本人が書を求めて訪ねて来ていた。

長崎を出港し、博多、愛媛を経由して神戸に到着したのは十五日のことである。さっそく清国神戸領事官の廖錫恩[45]が訪ねて来た。一行は神戸で鉄道局、工作所を見学した後、汽車（火輪車）で大阪へ向かい、紡績所、製紙所、監獄、博物場、病院、住友商店等を見学した。安寧丸は釜山に帰港するというので、一行は手紙を書いて船便に付した。朝鮮の翰墨を求める日本人は相変わらず大勢いて、姜晋馨は一日中ずっと筆を

とっていた。

「紳士遊覧団」一行は二十日まで大阪に滞在して、造幣局、大阪鎮台、操錬場、陸軍鎮台領兵所、天満宮、そして砲兵工廠を見学してから汽車で京都（西京）へ向かった。京都では、二一日から博物院、織錦所三か所、相国寺、女学校、女工場、盲唖院、本願寺、鋳銅器所、水輪機製作所、間風亭などの学校、工場、名勝地を見学した。随員たちは全員が見学に同行することはしていないようである。宿泊地で絶えず揮毫していた姜晋馨はようやく少し余裕ができたか、日本に渡ってから初めてお酒を飲んでゆっくりしたという。[46]

二十四日に、一行は琵琶湖、三井寺を見学して再び神戸に戻り、二六日に広島丸に乗船し、横浜に向かい、そして二八日に東京に到着した。二九日に一同はまた朝鮮に手紙を送付したが、これは十五日に続き、確認できる二回目のことであった。

これまでは体調不良の者を除いて、メンバーはみな一緒に行動していたが、東京に到着してからは、グループまたは単独での行動もするようになった。五月一日に外務省を訪れたメンバーは七人いたが、魚允中と洪英植はこの中に入っていない。そして五月二日に、他のメンバーが外務大丞宮本小一と面会した時は、宮本はすでに魚・洪の二人に会っていたという。

この日にまた、金正模という人物が朴定陽のところに訪ねてきたエピソードがあった。朴定陽は金正模のことを知らず、魚允中に聞いたところ、朴泳孝[47]の家に出入りする人物であると教えてもらい、会うことにしたという。金正模の詳細についてはよく知られていないが、興亜会の朝鮮語講師として一八八〇年十一月に招聘されて、一八八一年六月（共に陽暦）までの間、興亜会の例会に参加していたことが判明するが、忽然と姿を消した。新聞記事などによると発狂したという。[48]興亜会に顔を出さなくなったのは、時期的に魚允中たちと会って間もなくのことであろうか。

五月三日から、メンバーはそれぞれの宿泊地に移った。朴定陽、嚴世永、沈相学の三人、姜文馨と趙準永の二人、李鑢永、趙秉稷、閔種黙の三人、そして魚允中と洪英植、李元会の三人で、グループに分かれて宿泊していたようであるが、互いに頻繁に行き来していた模様である。魚允中らの宿泊先は西紺屋町（現京橋周辺）にある鈴木泰の家であった。[49]

三．清国公使館との接触

五月三日に、メンバー全員で文廟（孔子廟）に詣でて、翌日に李鑢永、李元会と随員の宋憲斌が清国公使何如璋[50]と参賛官の黄遵憲に会った。魚と洪が同行していたかどうかについての記述はないが、宿泊先が一緒でその後も共に行動していたことが多く、さらに、二人は清国公使館とつながりを持っている金弘集と同サイドの者であったことを考えると、この時に同行していた可能性が高いと推測される。いずれにせよ一行が清国公使館と接触したのは、確認できる範囲内ではこの日が初めてである。朝鮮と清との間には、宗属関係があることは周知の通りであるが、「紳士遊覧団」のメンバーも第二次修信使の時と同様に、東京に着いてからすぐに「上国」の代表が駐在する清国公使館を訪れるのではなく、まず孔子廟を詣で、それから訪問したのである。

メンバーの中で、次に清国公使館を訪問したと確認されるのは五月五日の朴定陽である。しかしこの日は公使の何如璋が病気だという理由で会うことができなかった。そこで、朴定陽は二日後の七日に再度、清国公使館を訪ねるが、公使が外出していたため、またしても会えなかった。五月八日の三度目の公使館訪問で、朴定陽はやっと何如璋と副使の張斯桂[51]に面会できた。この日は魚允中と洪英植も同行していた。

魚允中がいつ、どの程度の頻度で清国公使館を訪ねたかについての記録はないが、朴定陽を例に、メンバーと公使館の接触状況を見てみよう。朴定陽はその後、五月二十二日（沈が同行で張斯桂と黄遵憲を訪ねるが、二人は外出していたので何如璋だけに会った）、六月一日（厳、沈が同行して黄遵憲に会う）、七月七日（趙、厳、沈が同行して何如璋を訪ねるが、出かけていて会えず）、七月八日（趙、厳、沈と一緒に清国公使館へ別れの挨拶に行き、何如璋に会う）と、少なくとも公使館を四回訪問している。公使館側からは一度だけ、黄遵憲が七月十一日に別れの挨拶をするために朴定陽たちを訪ねて来た。面会できないこともあったが、二か月余りの滞在で七回以上訪ねており、これは高い頻度と言えようか[52]。ほかのメンバーの訪問もあってのことから、公使館側から見れば、かなり頻繁な来訪と感じているであろう。実際、何如璋は清の総理衙門宛ての書簡で、「紳士遊覧団」のメンバーとは「屢屢見面」しているということを重ねて報告している[53]。

何如璋ら清国の駐在外交官は、一行の随員も含めて数十人と代わる代わる面会していたが、残念なことに、会談内容の記録は五月十七日に李鑑永との間で行った一点しか残されていない。そのほかの会談内容は、何如璋の清への報告から一部ではあるが、知ることができるので、以下に紹介する。

まず、何如璋は「紳士遊覧団」から得た情報として、次の①～⑧の内容（五月二八日付）を総理衙門に報告している。

①彼らは命を奉じて日本の政治のあらゆることを視察するために来ていること、②朝鮮国内の状況を聞くと、国王と主要大臣はみな外交を好むが、民心はなおそれを願っていないという。これは金弘集から送られて来た手紙にある話と同じであること、③国中は安静であると言えるが、三月に安東の老いた儒生二、三百人が伏閤上疏[54]して、強く外交を諫め、一時は騒乱となったこと、④以前に訪ねて来たことのある委員の李東仁は今回も一緒に来る予定であったが、出発する時に消息がなくなり、行方不明となった。被害から逃げるためだったという話があったり、殺害されたという話があったり、真偽がわからないこと、⑤香港の新聞「申報」に、朝鮮国内に内乱があり、日本の援護を要請したと報道されたことについては、まったく根拠のないでたらめであること、⑥仁川開港の件については、すでに十五か月間の開港を許した。日本との関税を設定するなら、税率を輸入が十％、輸出が五％にする案を花房公使と相談したらと勧めたが、彼らは関税についての交渉権限がないと言ってそれを断ったという話、⑧七、八月の間に金弘集が再び日本に行って、外務について相談するであろう、という話であった[55]。

このように、何如璋は「紳士遊覧団」から情報を得ているが、②にもあるように、金弘集との書信の往来を通して情報を入手していることが分かる。ただ金弘集のほうから見れば、これは情報を伝えて何如璋に相

談していることになるが、必要性を感じてのことであろう。ちなみにここで言及されている金弘集の手紙は、四月三日に李東仁が携えて来たもの（一八八一年二月三日付）であると考えられる。そこには、設立されたばかりの統理機務衙門の人事、組織図が書かれてあった[56]。また、発信時期はちょうど、金弘集・李祖淵らが花房公使と戦艦購入計画を話した時期と重なっている。李東仁は一足先に東京に行ってその手紙を伝達し、どこかで「紳士遊覧団」と合流しようとしたが、それが叶わなかったのであろう。

何如璋は早い段階から清露間の緊張に対して関心を持っていて、ロシアが朝鮮を併呑する可能性があると主張していた。さらに総理衙門から第二次修信使が渡日した際に、朝鮮に「門戸開放」を勧告するよう指示を受け、金弘集に「聯米論」を提起したのである。それは、ロシアによる侵略の脅威と西洋諸国からの条約締結要求に備えて、先に比較的「公平」であるアメリカと早めに条約を結ばせ、「後援」を願うというものであった[57]。

そのため、何如璋は五月十七日の李鑢永との筆談で、清とロシアとのイリをめぐる紛争が終結し、今ロシアがまだ南下して来ていないこの時、アメリカと通商条約を締結すべきと勧めたのである。李鑢永はこれに対しては承知したと述べるに止まった[58]。

朝鮮の対米開国が清の焦眉の問題を解決する一つの方法だと考えている何如璋は、六月十二日付の書簡で、来訪している朝鮮の人は「皆甚関心球案、再三致詢」と報告している。琉球問題について関心を示しているメンバーのことを評価した上で、彼らは日本の一切を視察するために来ているが、政治、外交、兵制に対してみな非常に注意深く留意しており、状況がよくわかる「明白者」が多く、彼らが発奮して自強を果たすことができれば、（清の）東への憂慮が緩和するのであろうと述べている[59]。

その「明白者」とは誰なのか、ここはまず洪英植と魚允中の二人と見て間違いないであろう。何如璋は魚・洪の名前を挙げて「甚開明、極願外交」と評価している[60]。何如璋は六月二日に魚・洪の二人と筆談をしたが、その内容を総理衙門に報告した。それは、魚允中らが、実は国王の命令を奉じて専ら外交の利害を探るために来ているのだと述べて、アメリカとの通商に関しては、今この時期であれば、過日のように国書の受理を拒むようなことは絶対ないであろうという内容であった[61]。

しかし魚と洪の二人が何如璋と面会したのは、この時が初めてではなかった。それまでは、対米開国について前向きな姿勢を示さずに沈黙していたのか、それとも前にも言及したように、「紳士遊覧団」のメンバーは機会があれば、朝鮮国内に書信を送付していたので、滞在中に新たに指示を受けたのか、どちらも可能性があるが、ただの放言ではないことだけは確かであろう。それは、もう一つの伝統的なルートである、朝貢使節を通して清に伝えた情報と一致しているためである。朝鮮は同年一八八一年二月に、訳官の李容粛を天津に赴かせ、李鴻章に朝鮮の対米政策が転換したことを知らせていたのである[62]。魚と洪が示した対米通商に対する積極的な反応は、何如璋にとっては大きな朗報であったであろう。同時に、魚允中と洪英植もここで何如璋に期待され、信頼を得ることができたと思われる。

四、東京での活動

清国公使館との接触以外に、魚允中はどのような活動をしたのか。

まず、会った日本人官僚と有名な知識人は数多くいた。宮本小一の後に、五月六日からは順次、岩倉具視、井上馨、佐野常民、三条実美、熾仁親王、伊藤博文、黒田清隆、松方正義、寺島宗則、副島種臣、山田顕義、大山巌、川村純義、松方正義、重野安繹、増田貢などと面会していて、錚々たる顔ぶれであった。

見学した官公庁、学校、工場は、魚允中の復命書によると、外務省・内務省・大蔵省・陸軍省・海軍省・工部・農商務省・開拓使・元老院・大学校・士官学校・戸山学校・師範学校・工部大学校・海軍兵学校・機関学校・語学校・農学校・電信局・郵便局・印刷局・瓦斯（ガス）局・教育博物館・博覧会・製紙所、集治監・砲兵工場・育種場・横須賀造船所と記されている[63]。

魚允中が挙げたこれらの見学先は、ほかの「紳士遊覧団」メンバーと大きな違いは見られない。ほかのメンバーの復命書にも同じように、数多の見学場所が記されているが、宋憲斌の記録によると、そのほかに確認できる魚允中らのグループ行動は次のようになっている。

六月十八日には李元会、洪英植、金鏞元との四人だけで（随員・通事を除く）横浜に行き、「歴覧諸處造船」と造船所を見学した。七月四日には天皇の行幸の後について、宇都宮で歩兵第二連隊を視察したが、ここは李元会と洪英植の三人だけであった。さらに戸山学校操錬も李元会、魚允中、洪英植の三人で一緒に観たことになっている。魚允中はやはり、軍事関連のことを特に注視していたのであろう。

滞在中にまた、多くの宴席に呼ばれたようである。家に招いてくれたのは、伊藤博文、内務省権大書記官桜井勉、対馬藩主（宗重正）、渋沢栄一、宮本小一であったと記録されている。そして松方正義からは上野精養軒で、上野景範からは芝離宮で招待を受けた。

さらに七月四日から、各官公署を訪ね、別れを告げるメンバーたちの行動が始まった。随員の姜晋馨は帰る日程が決まったことに「歓喜無比」として、荷物を先に船便で神戸に送るため、荷造りして「益覚濶然」と帰心を綴った[64]。

七月十四日に、魚、洪とともに、李元会、金鏞元、趙秉稷が「事有未了」という理由で帰国しないという情報がメンバーに共有された。そして釜山で魚・洪が雇った通訳の武田邦太郎も共に帰国が遅れる。こうして先に帰るメンバーは横浜へ向かったが、一方、残っていた魚允中らは十五日に、砲兵工廠において「民敦銃（ライフル銃）の金具及弾薬等」を検収し、金四百十六円十六銭の代価を支払っている。その後、上野精養軒にて陸軍少将小沢武雄の主催する餞別会に参加した[65]。

そして翌十六日に、魚允中と金鏞元は、先に東京を出発したメンバーを見送るために横浜に向かう。趙秉稷、洪英植、李元会は同行せずに神戸で合流することにした。東京に残った理由の「未了之事」の処理は済んだようであるが、それはすなわち購入した兵器の検収である。どの程度の量を購入したのかについての記録はないが、国王に支給されたメンバー一人当たりの旅費千三百六十五円と比べると、金四百十六円十六銭は相当な金額であると考えて良いであろう。

帰国するメンバーは横浜、神戸を経由して長崎に向かう予定であったが、神戸で合流することになっていた洪英植たちの到着を待つために七日間留まった。そこに、客が訪れて来た。五衛将の李健赫、そして鄭秉夏[66]である。彼らは各種機械類を購入するために日本に渡ったという[67]が、この「来客」の存在について朴定陽は耳にしていなかった。鄭らはそのままメンバーたちと一緒に、閏七月一日に長崎から帰国した。このことから、どうやら兵器を購入したのは魚允中らだけではなかったことが分かる。

日本に残っていた魚允中に対して、帰国したメンバーからは慰労する手紙が送られてきた。彼らは滞留の理由について、具体的に何であるかは述べられていないが、なすべき任務があるからと納得しているようであった[68]。

Ⅳ. 魚允中の清国行き

一. 魚允中の記録

魚允中はこの後の自身の行動について、『従政年表』で以下のように記述している。

七月二一日　往横浜、送同来諸公先帰
八月二七日　自横浜、乗汽船而西
九月一日　在神戸、逢信使趙秉鎬、従事官李祖淵
九月六日　乗船向長崎
九月九日　到長崎
九月十日　向上海
九月十二日　到上海、訪王松森
九月十三日　訪蘇松道劉瑞芬、太守陳宝渠及鄭官応
九月二四日　乗船向天津
十月二日　到天津、留招商局、摠弁唐廷枢、委員黄□□倶歓待
十月六日　往見津海関道周馥
十月十日　謁李中堂鴻章
十月十日　自天津招商局、乗汽船而南
十月二四日　還到上海
十一月一日　還向長崎
十一月七日　自長崎與信使一行、同舟而西
十一月十日　還東萊
十二月十四日　還京復命[69]

これを見る限り、魚允中は七月二一日に横浜で「紳士遊覧団」一行の帰国を見送ってから、閏七月を経て八月二七日までの約二ヶ月間、ずっと横浜に滞在していたことになっている。その後に西へ向かい、神戸で信使の趙秉鎬と従事官李祖淵に会った。さらにその五日後に長崎を経由して清に赴き、上海で王松森、蘇松道の劉瑞芬、太守の陳宝渠、鄭官応のもとを訪れた。上海に十二日間滞在した後に天津に行き、招商局に留まって摠弁（総弁）の唐廷枢と委員黄某の歓待を受けた。天津では津海関道の周馥を訪ねて、ついに李鴻章に謁見したということになる。

魚允中は高宗への復命では、この清国行きのことを報告している。劉

瑞芬、李鴻章、そして周馥に会ったことが記されており、上海の江南製造総局にて銃砲などの兵器弾薬の製造を見学したことも書いてある。また、高宗も魚允中に清の状況について質問をした。つまり、清に行って来たことは公にしても良い情報であったと見える。しかし日本に滞留した理由について、自分は先に帰国した「紳士遊覧団」メンバーと比べて、才能がない上に見識が浅く、見聞を申し上げることができないため、さらに数カ月留まることになった[70]と述べている。もちろん、神戸で信使たちに会うまでの二ヶ月間、懸命に見聞を広めるべきで、何もしていないはずはないが、清へ渡る前の期間においての行動を語っていない。

もう一つ気になることは、魚允中は清朝行きの目的を具体的に述べていないため、これまで「李鴻章の下で締結交渉が進められている朝鮮と米国間の条約草案を検討するため」と、当時の状況から推測されていた[71]。しかし何如璋の九月六日付の報告書には「朝鮮外交利害、前洪英植帰国時、謂当帰告政府、詳陳一切。計洪英植此時到国未久、其政府能否楽従、俟有来函、即当馳達[72]」とあるので、朝鮮政府の態度はまだはっきりしておらず、朝米条約の草案を検討するには時期尚早であるとこの時何如璋は思っていたようである。このことを清の資料に頼って傍証すれば、魚允中は李鴻章との面談において、清との間の「互市」を停止し、民間の自由貿易を行うように求めた。そして朝鮮における日本の勢力拡大を阻止したいという理由で、「華商」（清国商人）の貿易進出を要請した[73]。魚允中がこのように述べていたことは確かであるが、果たしてそれが清国行きの真の目的だったのか、次に「談草」という新資料を紹介してこのことを検討して見たい。

二．資料「談草」について

「談草」は、四七頁からなる冊子の形で韓国学中央研究院蔵書閣に所蔵されている（史部：雑史類：二―一九〇）。日付と項目で示しているように、魚允中が清に行く前と清に行った後の筆談、合わせて十六点が収録されている。

①閏七月一日　黄遵憲晤談
②七月十四日　何公使晤談
③七月十五日　與黄公度往上野池亭晤談
④七月十八日　往見花房義質
⑤七月二八日　赴井上馨家
⑥八月一日　訪問何公使
⑦八月二二日　往清公署（何如璋、黄遵憲）
⑧八月二二日　往見井上馨
⑨八月二三日　何公使来訪
⑩九月四日　神戸領事　廖錫恩
到上海後
⑪九月十九日　李観察興鋭来訪
⑫九月二二日　別劉海道瑞芬
⑬十月八日　見唐廷枢
⑭十月二二日　在船中晤高驂麟仲郢
⑮十月二三日　在船中晤李毓林黙庵

⑯十一月四日　余璃来訪

「談草」は한임선「장서각 소장자료『談草』를 통해 본 魚允中의 개화사상」（「蔵書閣所蔵資料『談草』を通して見た魚允中の開化思想」）[74]と김기엽「一八八一년 어윤중이 쓴 담초（談草）의 특징과 대담에 나타난 한・중・일의정세」（「一八八一年魚允中が著した『談草』の特徴と対談に現れた韓・中・日の情勢」）[75]によって紹介されている。両論文は資料の構成と内容の紹介が中心で、題名通りに会話の中から「魚允中の開化思想」と「韓・中・日の政治情勢」に関する内容を抽出して、それぞれのテーマにそって検討を行ったものである。十六点もある筆談は長短さまざま、その内容は実に多岐にわたっており、テーマを挙げると枚挙にいとまがない。また、会話は相手がいるという性質を考えると、慎重な史料批判が必要である。

「談草」は有名な「大河内文書」[76]のように、書いた筆談そのものを貼り合わせたものではなく、交わした筆談を書き写したものである。それを記録した人の「編纂」が加わっている可能性は排除できない。しかし底本に基づいて編集された『従政年表』のように、大きな増減はないと考えられる。筆談は閏七月一日からとなっており、それより以前のものについては散逸した可能性もあり、閏七月になってから記録を始めたと断言する十分な根拠がない。また、その形式に関しては、前述の李鑢永の筆談記録、そして「談草」には収録されていないが、魚允中が十月二八日に何如璋の後任公使となる黎庶昌[77]を訪ねていた時に行われた筆談とも同じ形式をとっており、特異性は見られない。

三．「談草」の主な内容

以下において、「談草」に記されている筆談の内容について検討してみたい。

1．黄遵憲との筆談

黄遵憲との筆談は閏七月一日と十五日の二回収録されている。閏七月一日の冒頭に魚允中が、「公署只拜何大人、未拜先生、毎以為悵」と述べているので、この日に二人が初めて会ったことが分かる。しかし黄遵憲は魚允中が宇都宮に行く（七月七日）前に、わざわざ人を遣わして書物を贈り、会う約束をしたが、延び延びとなって一ヶ月近く経っていた。そして黄遵憲は洪英植をはじめ、多くの「紳士遊覧団」メンバーと会っていた。洪とよく行動を共にしていた魚允中だが、何如璋を訪問しても黄遵憲を訪問することはしなかったのである。これは単なる偶然のことなのであろうか。魚允中と黄遵憲の筆談の量の多さを見ると、二人は長時間にわたって会談していて、話が盛り上がっていたことが窺える。そこで思い出されるのは、金弘集が黄遵憲の『朝鮮策略』を携えて帰国した後の指弾を受けたことである。魚允中は敢えて他のメンバーがいるところで黄遵憲に会わなかった可能性は排除できない。

二人は互いへの敬慕を述懐した後に、税則を協定するために日本に来る予定の趙秉鎬と李祖淵について話した。当初は金弘集が信使として来る予定であったが、趙秉鎬に変わったことについては、黄遵憲も魚允中も知っていたようである。

そして互いの関心事である関税、通商についての話が交わされ、開国について賛成の立場にいる李裕元の失職、そして反対の立場にいる李晩孫のことが話題になった。李晩孫は黄遵憲について、「彼黄遵憲者、自称以中国之産、而為日本之説客、為邪蘇善神、甘作乱賊之嚆矢」[78]と痛烈な批判を浴びせていた儒学者であったが、黄遵憲は彼のことを「才気可採、其忠愛可敬」と、案外高く評価している。黄は筆談の相手が朝鮮人だからと自分を批判している人に対しても、無理に評価を与えているのではないようだ。六月二十日付の宮島誠一郎との筆談においても、黄遵憲は朝鮮に李晩孫重用を提言していたと言っていることから[79]、心底からその才能を評価したのであろう。

李東仁の消息も尋ねられたが、魚允中は「見斃於凶人之手」と、すでに死亡したことを告げた。李東仁が亡くなっていたら、計画していた戦艦購入はどうなるのか。

筆談ではしばらく明治維新をめぐっての意見が交わされた。魚允中が維新を失敗例と見て、朝鮮はそれを前轍とすべきだと述べているのに対して、黄遵憲は、今は昔と状況が異なり、平穏を求めては生き抜くことはできないと、これまでの朝鮮の慎重な対外姿勢を批判した。それを聞いた魚允中は、そういう話は日本人からも聞くが、信頼できない。清国人の言うことこそ信頼できると黄遵憲に言った。そして清の有力者は誰かと尋ねた。そこで黄遵憲が名前を挙げたのは、李鴻章、左宗棠（一八一二～一八八五）、劉錦棠（一八四四～一八九四）、楊昌濬（一八二五～一八九七）、張樹声（一八二四～一八八四）、丁宝楨（一八二〇～一八八六）、劉坤一（一八三〇～一九〇二）、劉長佑（一八一八～一八八七）、張曜（一八三二～一八九一）、金順（?～一八八六）、銘安（一八二八～一九一一）である。みな、太平天国軍と戦った名将と洋務派高官である。なお、金順と銘安は満人である。『魚允中全集』には、彼らの名前が同じ順番で書かれていたメモが収録されている[80]。

魚允中の日本人は信頼できないという発言を受けて、黄遵憲は自分の著した『朝鮮策略』にある「結日本」という記述を挙げて、それは日本人の中で「有礼」の者については「極力保護」し、「無礼」な者に対しては「極力争辨」すべきだと言う意味であると説明し、日本からの情報を分別し、選択するようにと忠告している。

興味深いのは、黄遵憲が、魚允中の同行している人の中に日本語の通じる人はいないかと質問し、続いて、黄は尹致昊という人が中村正直のところで勉強しているが、年少で聡明であるがゆえに、一、二年で日本語が通じるようになるだろうと話していることである。尹致昊は前述の通り、魚允中に釜山から同行して来たことは確認できないが、随員となっている。すでに同人社に入学して、黄遵憲の耳にまで入っていたということは、評判になっていたようである。これは本来ならば、魚允中のほうが詳しいはずで、彼から発するべき内容であるが、黄遵憲の方から聞かされる形になっている。ここに尹致昊のことについて、魚允中の反応は書かれていない。

二人の話は尽きることなく、漢学者や商業の状況、そしてついに兵器の購入に及んだ。そこでは、日本も清も、西洋から兵器を購入しているという情報が共有されている。また、明治期の御用商人として軍需品の調達などで有名な商人大倉喜八郎についても話が出た。その内容から

は、以前、大倉が魚允中に書籍を贈っていた場に、黄遵憲が一緒にいたことが分かる。つまり魚と黄の面会回数はもっと多かったのであり、筆談記録はすべてが残ってはいないということが明らかである。

2. 何如璋との筆談

何如璋との筆談は四回分が収録されている。そのうちの七月十四日、八月一日、八月二二日の三回は黄遵憲が清国公使館を訪れて行き、八月二三日は何如璋のほうから訪ねて来た。また、八月二二日は黄遵憲も同席していた。

これまでに魚允中はすでに何如璋と数回面会し、外交に対して積極的な姿勢を見せていたことは、前述した通りである。二人の筆談は近頃の釜山や琉球問題に関する新聞記事から始まった。何如璋は琉球問題については、すぐに解決できないので、徐々に議論を重ねていくしかないとの考えを示した。清は国内が安定したところで、海・陸両方の兵力を整備する予定であり、とりわけ英仏の両国に装甲船（鉄甲）などの兵船を注文する予定だと話した。これは金弘集らの計画している戦艦購入と関連ある話だが、魚允中の考えは記されていない。

また、何如璋の話として、戦艦の購入に要する費用は膨大であり、状況を見ながら順番に進めていくべきだとある。日本は近年、急速に政治改革を進め、財金が流出し、国がそのせいで空っぽになっている。みんなそれを知っているが、救おうとしてもなす術がなく、まことに嘆かわしい、とも書いてある。こうした日本財政の「失策」については繰り返し話されていた。魚允中の高宗への復命にも同様の意見が見られる。魚允中の明治維新への批判的な評価には、こうした何如璋からの影響があったのではないかと考えられる。

魚允中は日本の財政を批判するが、清の「近代化」産業に対しては称賛している。たとえば、福州船政局が日に日に隆盛の勢いを見せていることを聞いたと魚允中は言っている。さらに魚允中は自分の願うところは中国のますますの富強と李相伯（李鴻章のこと）閣下のご健勝であるとも述べている。これを聞いた何如璋は喜ばないはずがないであろう。

何如璋と魚允中の筆談には、通商、外国情勢、そして関税に関する話が多く、「出洋生徒」についてまで及んだ。これは清で一八七〇年代から始まったアメリカへの留学生派遣のことであるが、十二～二〇歳の生徒を四回に分けて一二〇名を派遣したが、その多くは活躍できず、十五年の留学期間の前に途中帰国し、結局一八八一年に全面撤廃したのである[81]。

魚允中は何如璋の話題に関心を示し、更に何如璋の税率や議会制度などについての考えも熱心に聞いた。また、「尚武」こそが「今日立国之本」であるという黄遵憲と何如璋の意見にも賛同の意を示した。

そんな中で魚允中は、いつか李鴻章に会ってみたいと願い出ていたのであろうか、八月一日の筆談には「将来足下晤伯相（李鴻章のこと）、推広港口通商之事、不妨言及」とあるので、ここにはじめて李鴻章に面会する話が浮上してきた。そして八月二三日に、何如璋が突然魚允中を訪ねて来て、魚が清に行きたいというので、明日の夕方に人を遣わせて上海、天津への紹介状を取りに来るように（「則請於明日傍晩着人来館取津滬之信」）と話した。

何如璋はやや心細そうにしている魚允中に、王松森（号は心如）という輪船招商総局の「文報委員」のことを紹介した。文報委員は手紙の伝達を担当する者であるが、王松森は何如璋と張斯桂の専属であるという[82]。彼に上海での宿泊のことから、天津まで往来するまでの間のすべてのこと（「一切之事」）を委託したので、安心して封筒に書いてある住所を尋ねるようにと言った。

ここの筆談から、魚允中が以前に租界の近くを見学したいと言っていたことが確認できる。また、魚允中は景勝の探訪が目的ではなく、見識高い人に会いたいのだと言った。すると何如璋は、それなら龍華製造局（江南製造総局のこと[83]）には漢訳されたたくさんの西洋書があり、天津新城にて新式軍の操練、製造局も二か所あるのでぜひこれらの場所を見学するようにと勧めたのである。ほかに観たいところがあれば、天津で李鴻章に会って申し出れば問題ないであろうと言った。最後に、「彼此招免商務の一節、閣下李伯相に晤う時に言ってみれば良い」と言って別れた。

このように、魚允中は何如璋の仲介、支援を受けて清に赴くことになった。これまでの研究では、魚允中たちが何如璋と面会を重ねる中で、何らかの形で清国行きの計画が浮上したと推測するに止まっていた[84]。その目的についても同じく推測の域を出ることがなかったが、この筆談資料を通して、何如璋は魚允中に、清との「商務」を展開することを願い出てほしいということが分かる。一方の魚允中は、これまでの滞在中に、何如璋と黄遵憲から関税に関する多くの情報を得て、加えて、関税について交渉する予定で来る修信使を待っていた。彼の関税に対する関心も高まっていたのであろう。それを裏付けるように、魚允中は七月十八日に花房義質公使と会った時も、七月二八日に招待を受けて井上馨の自家を訪れた時も関税についての自分の考えを述べていた。その内容についてもまた、何如璋と相談し、意見を仰いだのであった。

ただ、問題は何のための関税であるかということだが。見込んでいた関税収入は、「紳士遊覧団」として派遣された当初から計画に入っていた兵器購入ではなかろうか。そのためにも李鴻章に会いたかったのであろう。

3．清の洋務派官僚との情報交換

こうした何如璋ら清朝側と魚允中ら朝鮮側双方の思いが合致して、魚允中の清朝行きが決まった。魚允中は神戸で第三次修信使一行に会った後に、九月四日に一緒に清国領事の廖錫恩を訪問した記録も「談草」に収録されている。その後、魚允中は長崎を経由して無事に上海に到着した。王松森が迎えに来たらしく、魚允中は何の苦労もなく上海で見学することができた。何如璋のサポートのおかげであった。

九月十九日に上海機器製造局の総弁李興鋭[85]が訪ねて来た。魚允中は冒頭に昨日の訪問と書籍を贈呈してもらったことに対して感謝の意を述べて、今の時世は「即一大戦国」であると言った。この「大戦国」論は高宗への復命書にもあったが、魚允中の文章に現れたのはここが最初である。それから魚允中は、李鴻章のような「当代の豪傑」に会うのを心待ちにしていると述べた後、清の「人材」について訪ねた。黄遵憲との筆談の時と同じように、魚允中は清の有力な政治家に関心があったよう

であった。

次に造船のことと欧米へ派遣した清の留学生のことについて議論した。ここで魚允中は、改めて船を購入するのに多額の費用が必要であることを知らされた。そして清がアメリカから留学生を召還したことに対して、魚允中は技術を習得するには十数年を要するのに、派遣して五、六年で召還したのは良くないと、清の政策を批判したのである。大胆な発言である上に、留学事情に詳しい、という印象であるが、実はこれは何如璋との筆談から仕入れたばかりの情報であった。人材についての話の流れで科挙に関しての話へと移った。魚允中の意見は書かれていないが、李興鋭は科挙制度を痛烈に批判した。

これらの話がいったん落ち着いてから互いの出身や家族について話した。すると今度新たに派遣される清国公使黎庶昌は李興鋭と姻戚であることが判明した。魚允中はこのことを耳にしてから、天津に行ってからの帰り道の十月二八日に、まだ上海にいる黎庶昌を訪ねて行った。その筆談は清側に記録されているが、「談草」には収録されていない[86]。

天津に向かう前の九月二二日に、劉瑞芬[87]と短い筆談を行い、別れの挨拶をした。話の内容は「西人」との通商と日本人についてであったが、実は、劉瑞芬とは別の形で関わりがあった。劉瑞芬は別名「上海道台」の蘇松太兵備道道台であり、魚允中の復命書にも記載されている人物である。

実は、一八七九年に密かに上海に来た李炳龍という朝鮮の商人が、フランス商人に朝鮮人参を担保に金を借りたところ、返さずにトラブルになっていたことが九月六日に総理衙門に報告されている[88]。魚允中も李炳龍のことを知っていて、メモを残している[89]。ところで、八月十七日に何如璋から劉瑞芬に書信を送られた。その詳細は極秘の「密啓」になっているが、草目は「李炳龍欠法商亨達利銀両、希査明示復」と書かれている[90]。朝鮮商人の密売からのトラブルとは言え、日本にいる何如璋が「密啓」を出すほどのことはないのではないかと疑念を抱く。魚允中のメモの存在、発送時期と返信を求めていることから考えると、これは何如璋が魚允中の清国行きについて、清の洋務派官僚へ打診した一環であるか、協力の可否を相談したことを示すものではないかと推察できる。

それからの筆談は十月八日の唐廷枢[91]とのそれである。これもまた興味深いことに、どうやら唐は魚允中と東京で会ったことがあったようだ[92]。唐廷枢は再会を喜び、魚允中に天津に来た目的を訪ねたところ、魚は「我曰、欲謁李中堂兼謁老爺、而請教本邦即一自守之国也、至於今日不得不開商路、開鉱務、造兵器、而後国可保民可安、是可於大邦先覚一一仰質、願逐次賜誨」と答えた。傍点にあるように、魚允中はその目的を通商の道を開き、鉱業を開き、そして兵器を製造することについて李鴻章らの意見を伺うことにあるとしていた。

こうなると、話題は自然と鉱山の採掘、商船の購入、中国商人との合弁貿易のことになった。この時の唐廷枢は招商局総弁である。手掛けた唐山（開平）―胥各荘間の鉄道は建設中であったが、翌年魚允中が再度天津に来た時には乗車して、開平炭鉱を視察した。筆談にも有益な情報が盛られていた。ここで魚允中はアメリカに留学してきた学徒の状況についても尋ねた。李興鋭と九月十九日に筆談した時は、魚は何如璋の説

を借りて、留学生の召還に対して批判していたが、唐廷枢には彼たちの帰国を「甚好」とし、学業を修めてこれから「兵事」に関連する分野での活躍が期待できるものだと述べている。

この後の筆談二点は、天津から上海に戻る船の中で、十月二二日に高驂麟（号は仲郢[93]）と、二三日に李毓林（号は黙庵[94]）と交わしたものである。共通の話題は、船と武器の購入についてであった。おそらくは筆談相手の二人とも招商局の者であり、彼らの関心に近い話題であったのであろう。また、清に渡ってからの六点の筆談の中で三度目のことになるが、海外への学徒派遣がまたもや話題になった。ここでは、また魚允中の態度が変わり、留学生が技術を学んで一人前になるまでには十数年かかるものだとして、召還の時期が早いことを批判したのである。そして李鴻章や左宗棠に近い者、有力な官僚は誰であるかについても尋ねた。

収録された最後の筆談は長崎に戻ってきてから、領事余璃との間で交わしたものである。魚允中は領事館の人員、俸給について質問したのち、日本の条約改正についても尋ねた。余璃は逐一答え「強兵天下」であるべきと、軍備の重要性を述べた。

このように、清に渡ってから行われた筆談は、その時の相手によって話題が異なるが、共通の点もいくつか確認できる。すなわちそれは①清の洋務派官僚、有力な政治家への関心、とりわけ李鴻章に直接かかわりを持ちたいという気持ちが強いことである、②情報を取り入れてから、自分の意見として述べることがしばしばであったため、本当の考えであると安易に断定できない、③関心事は通商、船舶および兵器（購入と製造）、鉱山開発、留学生派遣などであった。ここで示された関心事は、いずれも魚允中が「開化派」と呼ばれるだけの根拠を提示してくれるものと言えるであろう。

しかし魚允中らの筆談を丹念に掘り下げていくと、相手によって考えを百八十度変えて言ったり、相手の話に合わせていたりすることがあるが、それは魚允中にとって大事なことではなかったからと考えられる。彼の最大の関心は終始、兵器にあったと見られる。通商にも関心を持っていたことは間違いないが、それは兵器購入費用を捻出ための手段である可能性が高い。

V. むすび

一八八一年四月に魚允中は、「紳士遊覧団」の一員として、日本の「新文物」視察のために国王高宗の密命を受けて、日本に派遣された。しかし彼は他のメンバーが帰国した後にも日本に留まった。その後、清国に渡って一か月余り滞在し、清の北洋大臣李鴻章をはじめ、複数の洋務派官員たちと面会してきた。

本稿は、朝鮮の対外的危機意識が高まり、兵器、戦艦の購入を検討するなど軍備の増強を図る時期に実施された「紳士遊覧団」派遣の背景を再検討した。魚允中は洪英植とともに、第二次修信使として一八八〇年に訪日した金弘集および李祖淵と同じグループに属しており、日本で兵器、戦艦の購入計画にかかわっていたことを明らかにした。

本稿はまた、魚允中の「紳士遊覧団」のメンバーの中での位置づけを考察し、彼の具体的な言動を跡付けて、その特徴を考察した。政治的

バックグランドが比較的弱い魚允中は、清国公使館と接触するなかで信頼を勝ち得て、最終的に公使何如璋のバックアップを受け、清に渡ることができた。そしてこのことが李鴻章との面会につながり、魚允中は朝・清間の「互市」を停止し、自由貿易の展開を求めたのである。

「談草」にある筆談の分析から、魚允中の「開化」に対しての考え、つまり彼の「世界像」を探ってみた。ただ、彼の行動は相手の出方という前提と周辺諸条件の制約を受けていた。このことについては清の何如璋や洋務派官僚についても同じことが言える。そういった相互の影響を可能な限り跡付け、魚允中がどのように影響を受けていたのか、その思想世界の一斑を窺うことができたように思う。この過程を解明できたのは、韓国学中央研究院蔵書閣所蔵の「談草」を丹念に検討したからである。これを踏まえて、さらに魚允中の「開化思想」の形成、その内実についての検討を進めることにしたい。

注

（1）『新版　韓国朝鮮を知る事典』（平凡社、二〇一四年）では、「紳士遊覧団」のことについて「一八八一年五月から八月にかけて、朝鮮から日本に派遣された朴定陽以下六十二名からなる政府視察団。目的は明治維新以後の日本の開化政策の実情調査にあり、日本滞在中、政治・経済・文化全般にわたって調査するとともに、三條実美太政大臣以下の要人と会見した。その報告は『日本聞見事件草』などの復命書にまとめられ、朝鮮政府内における開化派の発言力の増大と近代化政策を促した」と記している（原田環氏執筆）。早期の研究としては鄭玉子「紳士遊覧団考」（『歴史学報』二七輯、一九六五年四月）があるが、許東賢『近代韓日関係史研究　朝士視察団의 日本観과 国家構想』（国学資料院、二〇〇〇年）以降は目新しい研究は見られない。

（2）慎鏞廈「初期開化政策と開化運動」（『初期開化思想と甲申政変研究』知識産業社、二〇〇〇年）では、統理機務衙門を「最初の近代的な政治機構であって、初期開化政策を実現するための方法の中の一つであった」と評価している。また、全海宗「統理機務衙門の設置経緯に対して」（『歴史学報』第十七・十八合輯、一九六二年）、李光麟「統理機務衙門の組織と機能」（『開化派と開化思想研究』一潮閣、一九八九年）が詳しい。

（3）魚允中を「親清派」、「穏健（改良的）開化派」と評価している先行研究は数多くあるが、代表的なものとして原田環『朝鮮の開国と近代化』（渓水社、一九九七年）、月脚達彦『朝鮮開化思想とナショナリズム―近代朝鮮の形成』（東京大学出版会、二〇〇九年）、趙景達『朝鮮の近代思想―日本との比較』（有志舎、二〇一九年）などを挙げることができる。

（4）金弘集（一八四二～一八九六）は、初名が宏集、号は道園・以政学斎、本貫は慶州である。一八八一年第二次修信使として日本に派遣される。その後アメリカ、イギリス、ドイツとの通商条約、日本との済物浦条約、朝清商民水陸貿易章程など主要な対外条約締結に関わり、一八八〇年代から閔氏政権のもとで穏健開化派の中心人物であった。日清戦争後に三度内閣を組織し、甲午改革を断行した。

（5）「而問議官、雖是堂下官、任大責重、随事善処」（『承政院日記』高宗十九年二月十七日）。

（6）拙稿「一八八〇年代初頭における朝鮮の対清交渉――『中国朝鮮商民水陸貿易章程』の締結を中心に」（『朝鮮学報』第二二六輯、二〇一三年一月）。

（7）前掲趙景達『朝鮮の近代思想―日本との比較』二五～六頁。
（8）「東萊御史書契単」（許東賢編『朝士視察団関係資料集　十二』、国学資料院）五六九頁。
（9）許東賢「朝士視察団（一八八一）의 일본 경험에 보이는 근대의 특성」단국대 동양학연구소편『개화기 한국과 세계의 상호 이해』（국학자료원、二〇〇三年）、五七～六一頁。
（10）黄遵憲（一八四八～一九〇五）は、字が公度、広東省嘉応の人である。初代駐日公使の書記官として渡日し、日本の政治家・文人と交わり、日本研究を行った。一八八二年にサンフランシスコ総領事に転任し、以後イギリス、シンガポールなどの在外公館につとめる経験がある。著作に『日本雑事詩』『人境廬詩草』『日本国志』などがある。
（11）北原スマ子「朝鮮の対西洋開国とロシア認識」（『朝鮮史研究会論文集』第三三巻、一九九五年三月）。
（12）田保橋潔『近代日朝関係の研究』（朝鮮総督府、一九四〇年）七四六～七、七六七頁。
（13）花房義質（一八四二～一九一七）は、元岡山藩士である。朝鮮弁理公使の後は駐露公使を務め、農商務次官、宮内次官、枢密顧問官、日本赤十字社社長などを歴任した。
（14）前掲許東賢『近代韓日関係史研究　朝士視察団의 日本観과 国家構想』三七～九頁。
（15）「東萊暗行御史」が国王の密命を拝命した時期について、鄭玉子氏と許東賢氏の研究にずれがあるが、ここでは許東賢（『近代韓日関係史研究　朝士視察団의 日本観과 国家構想』五〇頁）に従うことにした。
（16）『従政年表』（『魚允中全集』（亜細亜文化社、一九七八年）八一一頁。
（17）李東仁（一八四九～一八八一）は僧侶であるが、開化派の先駆者であると言われている。詳しくは李光麟「開化僧李東仁의在日活動」（『新東亜』一九八一年五月号）、「開化僧李東仁」（『開化党研究』第十章、一九七三年）をご参照いただきたい。
（18）石幡貞（一八三九～一九一六）は、福島出身の漢学者である。一八七一年に外務省に出仕し、柳原前光に随行し清国に渡った。その後帰国して司法省に出仕していたが、一八七四年に外務省に戻り、「日朝修好条約」締結に携わっていた。一八八四年に『漢城遭難詩紀』を出版している。
（19）『日本外交文書』十四巻、一二二（二月二十日　朝鮮駐箚花房弁理公使ヨリ井上外務卿宛）、二九〇～一頁。
（20）李祖淵（一八四三～一八八四）は、字が浣西、本貫は延安である。一八八〇年第二次修信使金弘集、八一年第三次修信使趙秉鎬に従事官として同行し、日本との関税交渉にあたっていた。八二年の「中朝商民水陸貿易章程」の交渉にも関わったが、甲申政変の時にクーデター軍に殺害された。
（21）前掲『日本外交文書』十四巻、一二二、二九四頁。
（22）前掲『日本外交文書』十四巻、一二三、（二月二八日　朝鮮駐箚花房弁理公使ヨリ井上外務卿宛）、二九七頁。
（23）前掲田保橋潔『近代日朝関係の研究』七四七～五一頁。
（24）洪英植（一八五六～一八八四）は字が仲育、号は琴石、本貫は南陽である。日本視察から帰国後は統理交渉通商事務衙門の郵逓担当者となった。甲申政変で新政府をつくったが、清軍の介入で殺害された。
（25）前掲『日本外交文書』十四巻、一二二、二九二頁。

(26) 前掲許東賢『近代韓日関係史研究　朝士視察団의 日本観과 国家構想』五三頁。
(27) 前掲『日本外交文書』十四巻、一二三、二九八頁。
(28) 前掲許東賢『近代韓日関係史研究　朝士視察団의 日本観과 国家構想』五二頁にあるメンバーの経歴を、『高宗実録』に基づいて一部修正した。
(29) 前掲『日本外交文書』十四巻、一二三、二九九頁。
(30) 前掲『日本外交文書』十四巻、一二四、(四月十五日　朝鮮駐箚花房弁理公使ヨリ井上外務卿宛　李東仁失踪ノ件)、三〇二～三頁。
(31) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』四三三～四頁。
(32) 李鑢永「随録」(『朝士視察団関係資料集　十四』九〇頁。
(33) 李鑢永『日槎集略』(『朝士視察団関係資料集　十四』十五頁。
(34) 金弘集・李祖淵と石幡貞の一月二六日付の筆談において、金弘集は尹致昊、尹泰一、柳定秀の名前を挙げて、彼らは東京に留まって語学を学ぶ予定があり、花房公使に伝えてほしいと依頼した(前掲『日本外交文書』十四巻、一二二、二九二～三頁。
(35) 朴定陽『従官日記』(『朝士視察団関係資料集　十三』)三一八頁、七月二四日条。
(36) 前掲『朝士視察団関係資料集　十三』三〇〇頁。
(37) 一八八一年十月二四日に興亜会の親睦会に出席し、十一月に興亜会同盟会員となったことが確認される(崔蘭英・北原スマ子「『近代』移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究(一)―興亜会と亜細亜協会を中心に―」(常磐大学人間科学部紀要『人間科学』三七巻第一号、二〇一八年九月)。
(38) 前掲『朝士視察団関係資料集　十三』二八〇頁に「同航之諸公、次第来到、留連於萊府、而洪承旨英植、魚校理允中、尚不到来、乗槎無期、行事漸晩、可悶」と記してある。
(39) 前掲『朝士視察団関係資料集　十三』二七九～八〇頁。
(40) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』十五頁、一〇二頁。
(41) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』九四～九七頁。
(42) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』九三頁。
(43) 余璃(一八三四～一九一四)は、字が和介、号は元眉、広東省新寧の人である。一八七七年に初代駐日公使何如璋の隨員として渡日し、一八七八年から一八八五年までの間、初代駐日長崎領事として駐在していた。
(44) 町田三郎「初代長崎領事余璃とその書翰」(『九州中国学会報』Vol.二六(一九八七年)一〇四～五頁。
(45) 廖錫恩(一八三九～一八八七)は、字が樞仙、号は子曰亭主人、広東省博羅の人である。一八七七年に何如璋の隨員として渡日し、一八七九年から神戸理事官となった。
(46) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』一八四～五頁。
(47) 朴泳孝(一八六一～一九三九)は、字が子純、号は春皐、本貫は潘南である。哲宗の娘婿で、「急進開化派」の一員である。金玉均らと共に李東仁を日本に密出国させ、日本の情勢を探らせたとされる。
(48) 前掲崔蘭英・北原スマ子「『近代』移行期の東アジア知識人の人的ネットワークについての基礎研究(一)―興亜会と亜細亜協会を中心に―」、『横浜毎日新聞』一八八一年七月二三日付け「雑報」、萩原延寿『遠い崖―アーネスト・サトウ日記抄』十四、『離日』(朝日文庫、二〇〇七年)一四八頁。
(49) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』三九四頁。
(50) 何如璋(一八三八～一八九一)字が子峨、号は璞山・淑齋、広東省大埔の人である。一八七六年初代の駐日公使となり、翌年東京に着任した。一八八二十

月に年に帰国し、その後に福州船政大臣となったが，清仏戦争で南洋海軍が全滅したため退官した。『使東述略』、『使東雑詠』を著した。

(51) 張斯桂（一八一七～一八八八）は、字が魯生、浙江省慈谿の人である。「万国公法」の漢訳に携わり、序文を著した。

(52) 前掲『朝士視察団関係資料集　十三』二九九～三一八頁。

(53) 中央研究院近代史研究所編『清季中日韓関係史料』（以下に『中日韓』と略す）三六四（文書番号、以下同じ）中央研究院近代史研究所、台北、一九七二年。そして同三六五にも同じ文言があった。

(54) 李晩孫筆頭の「嶺南万人疏」のことであろう。その内容は衛正斥邪が歴朝の国是であるとしたうえで、黄遵憲の『朝鮮策略』を逐条論駁してその不合理を指摘したものである。「彼黄遵憲者、自称以中国之産、而為日本之説客、為邪蘇善神、甘作乱賊之嚆矢」と痛烈に批判している。『日省録』辛巳年二月二六日条。

(55) 『中日韓』三六三。

(56) 『中日韓』三六〇。

(57) 国史編纂委員会編『修信使日記』巻二（探求堂、一九七四年）。

(58) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』一三四～六頁。

(59) 『中日韓』三六四。

(60) 『中日韓』三六五。

(61) 『中日韓』三六五に「彼謂伊奉国王之命、専係探問外交利害、現在美国若再来叩関、如前日之却書不受理、断保其必無是理云々」とある。

(62) 拙稿「近代朝鮮の外交政策の一側面――『朝貢関係』と『条約関係』」（『朝鮮学報』第一八四輯、二〇〇二年七月）。『李鴻章全集』奏稿巻四〇、「答覆朝鮮所問事情」に「朝鮮国王委員李容肅（中略）呈該国請示節略一本、内載有領議政李最応奏章頗悔去年六月堅拒美国来使為非計、末即歸重於及今之務、莫如懐遠人而安社稷等語、又問他日不得已與各国相交先後早晩之策、又索中国與各国修好立約通商税則、帯回援照。是何如璋所稱朝鮮国王與各執政大臣決意外交而未敢遽発、固已確有明證」と記載してある。

(63) 前掲『従政年表』一二三頁。

(64) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』二一一頁。

(65) 前掲『朝士視察団関係資料集　十四』四三九～四四〇頁。

(66) 鄭秉夏（一八四九～一八九六）は字が子華、号は南皐、本貫は温陽の人である。中人の出身であるが、一八八〇年代後半から密陽府使、内蔵院長、農商工部協判などを歴任し、『農政撮要』を著した。『韓国民族文化大百科事典』は「紳士遊覧団員」であると記述しているが、初期のメンバーに入っていないため、再考を要する。

(67) 前掲『日本外交文書　十四巻』一二九、三〇八頁。

(68) 朴定陽は日本を出発する十日前に、「一自横浜拜別、以後漠然阻誨…祝體居以時護安、従速復路」という内容の書信を書いた。同じ日だと思われるが、厳世永の手紙には「秋風異域一去一留、此別此情罕於古者、今値之矣、天地涯角依依恋想…借後旅體連享康吉、兪尹諸君恣意游覧、一行万平、大小均穏…」とある。また、十月に沈相学の書信は「使事幾至護竣、而返旌当在何間否憧憧、懸祝貴第一安云可賀、而歳晩異域行人之思、益当叵耐、為之拱念不置…兪友与尹生俱得泰平作客、而武田傳語亦一向做安耶、係切願聞者、尓所欲言者、不止於此…」とある（『魚允中全集』に収録「簡牘要抄一」五二九～三一頁）。

(69) 前掲『従政年表』一一七～八頁。

(70) 前掲『従政年表』一二三頁。

(71) 前掲原田環『朝鮮の開国と近代化』第十章「朝鮮の開国近代化と清の対応」、二七五頁。
(72) 『中日韓』三七〇。
(73) 前掲拙稿「一八八〇年代初頭における朝鮮の対清交渉――「中国朝鮮商民水陸貿易章程」の締結を中心に――」。光緒八年正月六日付の李鴻章から呉大澂宛ての書信に「朝鮮陪臣前求停派員前往互市省累、但准民間自相貿易」と記してある（国家清史編纂委員会編『李鴻章全集』安徽教育出版社、二〇〇八年版三三、一〇六頁）そして『中日韓』四二〇―付件（二六）に「忠（馬建忠――筆者）曰、去歳魚允中在津與傅相（李鴻章――同）面談、曾有商請華商前来貴国貿易、以奪倭商之利」とある。
(74) 『蔵書閣』第二三集、二〇一〇年四月。
(75) 『정신문화연구』四一（二）二〇一八年六月。
(76) 実藤恵秀『大河内文書――明治日中文化人の交遊』（平凡社、一九六四年）王宝平主編『日本蔵晩清中日朝筆談資料：大河内文書』（浙江古籍出版社、二〇一六年）をご参照いただきたい。
(77) 黎庶昌（一八三七～一八九七）は、字が蒓斎、貴州省遵義の人である。
(78) 『日省録』辛巳年二月二六日条。
(79) 劉雨珍編『清代首届駐日公使館員筆談資料彙編』（天津人民出版社、二〇一〇年）五七四頁。
(80) 前掲『魚允中全集』九七頁。
(81) 王先明編『中国近代史』（中国人民大学出版社、二〇一一年十月）一三四頁。
(82) 蘇州科技院学報（社会科学版）二二、二〇〇二年五月。
(83) 江南機器製造総局（上海機器局とも呼ばれる）は一八六五年九月、曾国藩、李鴻章らによって上海において設立した最も規模の大きい近代軍事企業である。最初はモーゼル銃や手榴弾、砲弾等を製造していたが、一八八〇年代に砲弾、水雷、鋼鉄、栗色火薬、無煙火薬の製造所を相次いで設立した（前掲王先明編『中国近代史』一一七頁）。
(84) 前掲拙稿「一八八〇年代初頭における朝鮮の対清交渉――「中国朝鮮商民水陸貿易章程」の締結を中心に」。
(85) 李興鋭（一八二七～一九〇四）は、字が勉林。湖南省瀏陽の人である。太平天国の時に曽国藩の幕下に入り戦績を残した。一八七五年から上海機器製造局の総弁となり船舶や大砲の製造を担当した。
(86) 『中日韓』三八七―（一）。
(87) 劉瑞芬（一八二七～一八九二）は、字が芝田、安徽省貴池の人である。一八六二年に淮軍に参加し、一八七八年から一八八二年までに蘇松太兵備道道台（正四品）であった。
(88) 『中日韓』三六六。
(89) 前掲『魚允中全集』七六頁。
(90) 『中日韓』三六七。
(91) 唐廷枢（一八三二～一八九二）は字が建時、号は景星または鏡心、広東省香山の人である。洋務運動の推進者の一人として名高い。
(92) 「唐曰、東京一見、大慰平身、昨聞駕到、不勝欣悦、弟不暁此来有何見教否」とあるため、いずれかの時期に東京で魚允中らと会っていたと思われる。
(93) 高驂麟は、号が仲郢、生没不詳である。
(94) 李毓林は、号が黙庵、生没不詳である。『安徽人物大辞典』によると、著作に『六勿軒』（一八六三年）、『慎言齋文鈔』（一八九九年）がある。

O Yunjung's Visit to the Qing Dynasty in 1881

Lanying, Cui

O Yunjung, who visited Japan as a member of the "Shinshi Yurandan" delegation in April 1881 to observe "new products of culture," continued to stay in Japan after other members returned to their home country. After that, O Yunjung traveled to the Qing Dynasty, where he stayed for a month or so to meet with Governor General of Zhili Li Hongzhang and some other officials from the Westernization Movement, but the details of what he did during the stays were unclear.

Because of that, what is behind Shinshi Yurandan's visit to Japan is reconsidered in this paper, revealing that O Yunjung was involved in a plan to purchase a battleship and other weapons in Japan. In addition, O Yunjung's footsteps during his stay in Japan have been retraced to consider the role he took. An examination of notes detailing O Yunjung' communications in writing with Qing Minister to Japan He Ru-zhang and Counselor Huang Zunxian in "Danso(brushtalks)," which is currently kept at the Academy of Korean Studies' Jangseogak Archives, has also shown that O Yunjung's trip to the Qing was organized via the mediation of He Ru-zhang. Part of thoughts of O Yunjung, who was sent to the Qing due to a complication of plots of both Korea and the Qing, was made clear as well through the records of writing communications with Qing officials.